
成仏屋、氷室耕一。

MCおもむろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

成仏屋、氷室耕一。

【Zコード】

Z5734A

【作者名】

M C おもむろ

【あらすじ】

名前、氷室耕一。職業、成仏させることが職務の“成仏屋”。またの名を“逝かせ屋”。でもこれはカタカナで書いてはいけない。え?なぜかつて?もう、わかつてるぐ・せ・に!

人生のヒューロークから、プロlogueは始まる。（前書き）

大部分がシリーズです。しかし、続編（ぶつちやけ続編が本編）はギャグにしようと思っていたので、コメティーに入れました。

人生のヒローグから、プロローグは始まる。

私の名前は、本田絵里。

私は今、宙に浮いている。

言つとくけど、幻覚を見ているわけでも、ましてや、私が超能力者なわけでもない。

視界を下にあらす。

そこには、私がみるも無残な姿で横たわっていた。

頭からは血が大量に噴き出し、腕や足は不自然な方向に向いている。着ている服は、元から赤い色なのかと見間違う程だ。

私はトラックに引かれてしまったらしい。

トラックの運転手は慌てて私に駆け寄る。

「おい！だつ、大丈夫か！！」

大丈夫じゃないって。
魂抜けてるって。

「き、救急車！救急車だ！！」

無駄だと思つけどな…。

私は、下の慌ただしい喧騒をボーッと見ていた。

今日は用事があった。

私の片思い、クラスメイトの小坂君と映画を見る予定だった。
デートにこじつけるまで、相当努力した。

話をするだけでも緊張するのに、デートに誘ったのだ。緊張ビリの
の騒ぎじゃない。

この日のために髪型変えて、服も新調して、メイクもカンペキにこ
なしたのに……。

髪の毛は血だらけ。

服もタイヤに巻き込まれて、もはやパンク系だ。
メイクも青い顔には意味をなさない。

もうどうでもいいや……。死んじゃったんだし。

でも、なんで成仏できないんだろう。この世に未練なんてないのに。

……いや、あるか。

小坂君に告白できなかつた。小坂君と付き合いたかつた。
たぶん、私は死んでもこの世にいるだろう。

小坂君にくつづいて、いつまでも未練たらたらでいるのだろう。
一生、この思いを告げられずに。

……フ…それも詩的でいいじゃない。

「よかないよ。」

背後からの声に驚き、振り返る。

そこには、一人の男が立っていた。

その男は、精悍な顔立ちなのに、どこかやる気の無さそうな印象を
受ける。

「だ……誰……？」

「俺か？俺は氷室耕一。成仏屋だ。」

男は、優しく微笑んだ。

そこから、終わりだと思っていた私のストーリーは、始まりを告げた。

『前代未聞の食い物だぜ！知りてえか！？その名もハンペンだ！』略して前編

翌日、学校の屋上。

フヨンスの上に腕を組み、顎を乗せ、校門を見つめる。

私はある人を見ようとしていた。私の日課。これは、魂になつても
変わらない。

「なあなあ、何やつてんの？」

隣の氷室耕一とかいう男が話し掛けた。
この人はずっと私にくつづいてきている。

私は一瞥する。

「……あなたには関係ないでしょ。」

「つれないねえ。」

「というか、なんであなたは私についてくるの？」

「貴女の事が、好きだから……。」

「…………。」

「…………ほん。昨日も言つたら？俺は成仏屋。アンタを成仏させに

きたんだ。」

そう、この男は私を成仏させにきた。
あの世には、そういう職業が存在するらしい。

魂は生まれ変わる。

死んだら次の命へ、その命が死いたらまた次へ。

だけど、私みたいなこの世に未練がある人は生まれ変われないらしい。

その命の循環を円滑にするために、成仏屋が存在する。と言つ事だ。成仏屋はこの世への未練を取り除くまで、ずっととくつづいてくるみたい。

「氷室さん、私は成仏屋なんて必要ないです。」

「まーまー、いたら便利だぜ？一時的だけど、魂をこの世に実物化させることだってできんだ。」

「いらない。私は成仏する気なんてないですから。どうかに行ってください。」

「嫌！私、あなたについていくつて決めたんだから…」

「…………。」

「ま…まあ、これも職務なんだ。俺のことは気にすんな。氣体だと思え。スマッグガスだと思え。」

「いいぶんと有害な氣体だね。」

氷室さんは座り込んで、煙草に火をつけた。

私は、視線を校門に戻す。校門には登校中の生徒。その中に、目当ての人物が現れた。

そう、その人物は小坂君。私は朝早く学校に来て、登校中の彼をいつも屋上で見るのが日課だった。

勉強や部活動、いや、すべてに興味が湧かなかつた私が初めて興味をもつた人。

私は、勉強は努力しなくてもそこそこできたし、運動も得意だつた。外見も、すごい綺麗とまではいかないけど、それなりには整つている。

すべてが中の上。だから、何にも興味が湧かなかつた。

そんな時、小坂君に出会つた。

小坂君は、いつも何かに一生懸命になつてゐる。

勉強や部活動、趣味の釣りも、すべてに全力で取り掛かる。

一度、友達とみんなで釣りに行つて、小坂君は

「シャアアー！魚来いやあ！！」

とか言いながら、静かに釣り糸を垂らしてたな。

そんな姿に、私は次第にひかれていつた。

でも、この思いも、一度と届かないのだろう。

「…小坂君…。」

この声だって、届かない。

「ふーん、片思いの彼ねえ……それが原因か。」

私は思わず、飛び上がつてしまつた。

「なつ……なんでそれを……。」

「成仏屋は読心術もできるのだよ。」

氷室さんはフフン、と鼻をならす。

「……テー……」

「え？ 何？ 今日の「うん」は一段とかでえ？」

「サイテーって言ったの！ このバカ！」

バチーン！

氷室さんの頬を思いつきり平手で叩く。

「やべぇ田覓めやつ。」

「変態ー。」

私はそう言い捨て、視線を戻す。

小坂君は、すでに建物の中に入ってしまったようだ。

「……ハア……」

「ずっとやつやつてんのか？」

私は氷室さんを見る。

氷室さんはあぐらをかきながらフーンスによりかかり、手を頭の後

りで細んでいた。

「すうとすういやつて、遠田から見つめ。アンタはそれで満足な
か?」

私は氷室さんの隣に座り、膝を抱える。

「せつや……告白とかしたいにかど……。」

「じゅ、すつやこいじゅねーか。」

「したいけどー。」

私は頬を膝に乗せる。

「したいけど……できなによ。私、死んでるんだもん……。告白
しても意味なによ。」

「こや、そいつはどうかな。」

「え……?」

「いや……まあ、死んでも死んでも思つてぶつけるのに意味
なんていらねーだろ。大切なのは心だよ。」

「でも、それが小坂君の重荷になつたら……?」

「カーーー男つつーのは、重荷を背負つてなんぼなんだよ。それに、
そういうのを重荷だつて思う奴なのか?」

「小坂君はそんな人じゃないよ…」

「だったら、告白しなさいよ。」

この人は、そんなに私を成仏させたいのか…。

私は、少し軽蔑しながら氷室さんを見た。

だけど、氷室さんの口は真っすぐだった。

この人は、損得勘定なんてしないんだわ。ただ心から、私の未練をなくそうとしているのだろう。

そう思われる田は、少し小坂君に似ていた。

氷室さんが、私に笑いかける。

「小坂君って奴も、自分を思つてるせいで成仏できないなんて知つたら、そっちの方がいい思いしねーつて。それに、」

氷室さんは、私の頭にポンッと手を置いた。

「ほんなかわいこちゃんに好かれるのに、悪い思いなんてしないよ。

」

「…………告白…………してみよつかな…………。」

「おおー決まりだなーよし、そつとなりやあ俺も手伝うぜー」

「…………フフ。」

「ん? ビーした?」

「なんか、氷室さんって、お兄さんみたい。」

「……お兄さんじゃなくて、お兄ちゃんみたいって言つて?」

「……お兄ちゃん。」

氷室さんは頭を抱え、地面を転がり、悶絶していた。……大丈夫かな
……。

「……ハアハア……じゃあ今度はお兄ちゃん大好きって
「言ひません。」

氷室さんは膝と手を地面について、ものすく落胆していた。
……大丈夫かな……。

『後悔は一回もしたことがないねーえつへん!…………いやめど、うわ』 略して後館

夕方。部活動も終わり、生徒達が次々と学校を後にしていく。

しかし、体育館には生徒が一人、まだ部活動を続けていた。

部活の顧問がその生徒に話し掛ける。

「小坂一、おまえはまた居残りか。」

「はい。まだシユートの詰めが甘いんで。」

「どうせ明日も朝早く来るんだろう。鍵はまた預けとくから、遅くならぬようにな。」

「はーー! ありがとうござります!」

顧問は、だるそつに手を上げると、体育館を出ていった。

「優しいんだが、関心がないんだか……。」

小坂はそういうと、バスケットゴールに向き直る。
小坂の立っている場所は、3ポイントのエリアだ。

小坂はボールを何回かバウンドさせ、小さく息をはくと、ボールを頭の上に構えた。

足を軽く曲げ、上半身を少し反る。その反動で高く飛び、その瞬間、右手に精確な力を入れ、ボールを飛ばす。ボールは弧を描き、バス

ケットゴールに吸い込まれていった。

。

パシュッ

ボールが枠に当たらずに入った時の独特の音が、体育館に響く。

小坂君は軽くガツツポーズをする。

「おお、中々やるじゃない。」

「でしょ？す”いんだから。」

私達は、体育館の少し開いてる扉から、覗き込んでいた。

「……てかさ…俺等はあいつには見えないんだからさ。」

「わかつてゐねど…なんか恐いのよ。」

「……てかさ…君はいつになつたら戻るのかな？」

「わかつてゐけど……」

私は、あの後から、ずっと告白するチャンスを伺っていた。だけど、いやそのチャンスが来ても、中々踏ん切りがつかない。ずっと片思いだった人に、“あなたの事が好きです”なんて、簡単

に言えるわけがない。

「もひ、 “ テメーが好きなんだよバカヤロー ” って言つだけじゃねーか。」

「なんでそんなにケンカ腰！？氷室さんって、告白したことないでしょ！」

「バ、バカヤローー！俺は “ ノクリ屋いりちゃん ” って呼ばれたんだぞー！」

「じゃあ、どんな風に告白するの？」

氷室さんはしばらく考えた後、私を仰向けに寝かせ、そして抱き抱えた。

「たすけてくださいーーー！」

「パクリじゃんーしかも好きだつて伝わつてないよー？助けを求めてる事しか伝わらなによー？」

「じゃあアンタはどうなんだよー！」

「わ…私だって “ 国利屋えりちゃん ” って呼ばれる程ですよーー？」

「字が違うぞー！？なんか政治家にしか聞こえないんだけどー。」

私は、氷室さんを仰向けに寝かせ、抱き抱えた。

「国民の税金、私がつかつてますーーー！」

「自分の悪業告白しちゃったよーー！てか俺を寝かせた意味あったのー！？」

「人が動くのに理由はいらない。そう教えてくれたのはあなたですよ？」

「なんかそれらしいこと書いたら結局意味ねーんじゃん…！」

私達は、我に返った。

「そつだ… ほんな事してると場合じやないよ……。

「ま、早へこつて！」

「で… でも…」

「でもは無しー・まじー。」

氷室さんははそつぱつと、私の背中を押して、体育館の中に入れた。

氷室さんが指をパチンッと鳴らすと、私の体が一瞬光に包まれた。たぶん、これで小坂君に私の姿が見えるようになったんだろう。

ええい、もう行くしかない！

私は決意を固め、小坂君に歩み寄る。

小坂君は、私の気配に気付き、振り返る。

「…………おおーー本田ー昨日はビビった？ 具合でも悪かったのか？」

たぶん小坂君は、私がもう死んでいる事を知らないんだろう。まあ、昨日の今日だし、両親はまだ学校に伝えてないのかな。

「はなし、あるんだ。」

「ん? どうした? なんでも聞くぜ?」

小坂君は、ボールを放つて、私に笑いかけた。

「あのね、私、死んじゃった。」

私は、努めて明るく言ひ。

「え? どうこう事?」

「見てて。」

私は、氷室さんに四線で合図を送る。氷室さんは、指をパチンッと鳴らす。すると、私の足が、見事に消えた。

「なつ……ー?」

小坂君は、状況を飲み込めないみたいだ。

私の足があるはずの所を、手で探つている。

「信じたかな?」

「……信じたかなって……なんで……」

「昨日、映画館に向かってる途中にトライアックにひかれて。」

「そんな……嘘だろ……」

「それで、最後にお別れを言つにきたんだ。」

「最後……？だって……俺は……」

小坂君が俯き、手を強く握り締める。

「俺……おまえの事が好きなのに……」

私は思わず、口に手を当てた。

小坂君が……私を……？

「なによ……もつと早く言つてよ……」

「ホントだな……せめて……本田が死ぬ前に……クッ……」

小坂君は、手で目頭を押さえる。

小坂君の目からは、涙が溢れていた。

「泣いちや……ダメだよつ……私 成仏できないじゃんつ……」

「せういつ本田も泣いてるぜ？」

小坂君はそう言つと、私の涙を拭つて、少し笑つた。

ああ……この笑顔は、もう一度と見れないんだ……。

その時、私の体が光りだした。

体は少しずつ、小さな光になつて消えていく。

私は嗚咽を我慢しながら、最後になるだらつ葉を云ふ。

「私ね……ずっと前から……」

そう、ずつと。もういつからかわからなくなつてから、ずっと前から。

「小坂君の……事……」

好きなんだ……いや……

「好きだったんだ……。」

小坂君は、笑つて答える。

「はい、俺も……君の事が、好き……でした……」

意識がだんだん薄れしていく。

「小坂君、後ろ向いて……。」

小坂君は不思議がりながらも、後ろを向いた。

私は、小坂君に近づいて、抱き締めた。

「恥ずかしいから……」

「ハハッ！なんだよそれ。」

私のまわりの光が一層強くなる。

「小坂君……」

「ん？」

「今……笑つてる……？」

「……ああ……笑つてるよ……」

「小坂君はいつでも笑つていてね……。」

「……ああ……わかつたよ……」

「私の事、未練たらたらでいいでよーじゃないと、化けて出でやるから。」

「はは、わかつた。」

「…………でも。」

「ん？」

「たま」……たまにでいいから……私の事思いでしょ。」

「ああ、たまにな。」

小坂君はいたずらっぽく笑う。

私の視界が、完全に光だけになつた。

小坂君を抱き締める力も弱くなつていいく。

「……ごめんね……」

「『1』めんじやないだる……？」

「……そうだね……ありがと」

好きでいてくれてよかつた。

「ああ。」

「ありがと」……小坂君……

好きになれてよかつた。

あなたに出会いえて

本当によかつた……。

。

光は上り、そして完全に消え去った。

体育館の中には、小坂しかいない。

「……なあ……」

小坂は空虚に問い掛ける。

「“好き”じゃダメなのかな……“好きだった”じゃなきゃダメなのかな……」「……

もう、自分を抱き締めてくれる感覚はなくなっていた。

「今だけ……ちょっとだけ、泣いてもいいかな……？」

彼に答えてくれる者は、誰もいなかつた。

「…………うあ…………ウアアアアアア……」

小坂は振り返らずに上を見上げ、いつまでも泣き続けた。

『後悔は一回もしたことがないねーえっへんー…………いやあ、うひ』 略して後編

サブタイトルに無理がある

『ヒューリックタイトルに無理がありすぎだらローグ』略してヒューローグ

冴えない意識の中、重たいまぶたを開く。

私は仰向けになっていた。動こうとするが、体が思うように動かない。

「絵里ー田を覚ましたのねー！」

近くで、母親の明るい声が聞こえる。

「お母さん…私…一体…」

「あなた、トラックに跳ねられて重傷だったのよー。2日間生死をさまよっていたのー。もう、心配ばっかりかけて……」

母親が、ハンカチで涙を拭う。

トラックに跳ねられた…？ああ、記憶がよみがえってきた。

私は、小坂君と待ち合わせしてた映画館に向かう途中に、トラックに跳ねられたんだ。

それで、跳ねられた後、誰かに会ったような…。
ん？でも、跳ねられた後に会つておかしいな…。

よく思い出せない…。

その時、病室の扉が勢い良く開いた。

「本田ー！」

こ、小坂君！？

な……なんで小坂君が……！

「よかつた……マジでよかつた！」

小坂君は涙を流しながら、私を強く抱き締めた。

「え……なつ……！」

私の顔がどんどん熱くなっていく。

「“だつた”じゃなくていいんだな！？現在進行形でいいんだな！？」

「なつ！小坂君どうしたの！？よくわかんないよー。」

「……？……覚えてないのか……？」

。

一週間後。

病院の一室。

小坂君の話は、にわかには信じられなかつた。

だつて私が死ぬつて言つて、足がなくなつて、告白して……。

でも……小坂君が好きなことは、誰にも言つてないし。悟られるよう

な事もしないし……。

結局、それがきっかけで、私達は付き合ひになつた。

ケガは、頭に異常はなかつたけど、折れた腕と足で当分入院が続きそうだ。

でも、小坂君は毎日お見舞いに来てくれるし……。
言ひつけとはなし！

ガチャッ

ほらーーさつそく……

「おいーーっす！」

……違つた……誰かな？

「……どなたですか……？」

「君の心の中のお兄ちゃんさ。」

男の人は、真剣な口振りで喋る。

言つてる事がよくわからぬけど……。

男の人は、私の頭に手を乗せて、優しく微笑んだ。

「ま、元気ならいいんだ。じゃな。」

男の人はさつさつと、背を向けてドアの方へ歩きだす。

「…まつてー」

男の人は、ドアノブを掴みながら止まる。

「私…あなたにお礼を言わなくちゃいけないような……。
「お礼なんかいらねえよ。俺は成仏屋つていう職務を全うしたまで
た。」

男の人はそう言つと、手を上げながら去つていった。

私は閉まるドアをみつめながら、つぶやく。

「…ありがとうございます……成仏屋さん……。」

。

「う…ひっく…うう…」

人込みの中、一人の少女が泣いている。
少女には誰も気付かない。

一人のサラリーマンが、走つてくる。

サラリーマンは、少女に気付く素振りは全くない。

そしてそのまま、サラリーマンと少女がぶつかつた。しかし、サラリーマンは少女を通り抜け、何事もなかつたように走り去つてゆく。

「……ひっく……誰か……」

「どうした、嬢ちゃん…お困りのようだね？」

ふいに聞こえた背後からの声に、少女は振り向く。

そこには、一人の男が立っていた。

その男は、精悍な顔立ちなのに、どこかがやる気の無さそうな印象を受ける。

「……誰…？」

「俺か？俺は氷室耕一。成仏屋だ。」

男は、少女に優しく微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5734a/>

成仏屋、氷室耕一。

2010年10月28日04時34分発行